

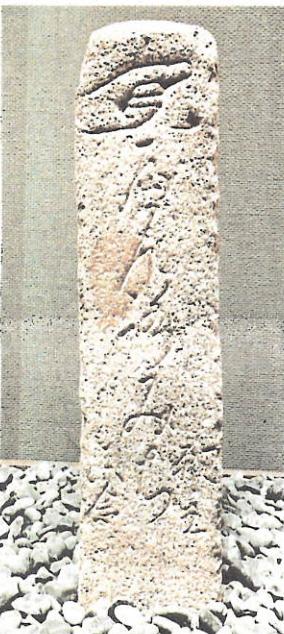
えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑯

本資料は江戸時代前期に真念が建てた遍路道標石で、四国八十八ヶ所霊場の第62番札所宝寿寺(西条市)の境内に保存され、当館に寄託されたものである。 真念は江戸時代前期の僧で大坂の寺島(現大阪市西区)を本拠として、四国遍路を20回以上行ったとされる。 現存最古の四国遍路方

真念の遍路道標石

江戸時代 200基余り建立



真念の遍路道標石(左は拡大図)。「左」の文字が指印に改刻されている

＝県歴史文化博物館蔵

正面 上部に分かれ道の方向「左・右」を示し、中央に「遍路みち」、下部に「願主真念」と刻まれているものが多い。左側面は「為父母六親」、その下に道標石を設置するために資金等を寄進した施主の在所と名前を記す。六親(ろくしん・りくしん)とは最も身近な親族や親族全体をさす。右側面には「ユ(梵字)・ぼんじ」、南無大師遍照金剛と刻まれ、弘法大師をたたえている。

本資料の場合、花崗(こう)岩製の角すい形で幅15センチ、奥行15.5センチ、高さ83.5センチを測る。碑文の内容を見ると、正面に「(右方向を指した指印) 遍ん路み

正面上部に分かれ道の方向「左・右」を示し、中央に「遍路みち」、下部に「願主真念」と刻まれているものが多い。左側面は「為父母六親」、その下に道標石を設置するために資金等を寄進した施主の在所と名前を記す。六親(ろくしん・りくしん)とは最も身近な親族や親族全体をさす。右側面には「ユ(梵字)・ぼんじ」、南無大師遍照金剛と刻まれ、弘法大師をたたえている。

本資料の場合、花崗(こう)岩製の角すい形で幅15センチ、奥行15.5センチ、高さ83.5センチを測る。碑文の内容を見ると、正面に「(右方向を指した指印)

で後世の道標石に比較すると小ぶりなことがあげられる。案内表示は道標石の正面には「左」の文字が刻まれていて、真念の道標設置活動に江戸の人物が関わっていることがわかる。また、「一の宮」とは一之神社の別当寺であった宝寿寺と考えられる。宝寿寺は場所が幾度か移転しており、前述した案内表示の修正はそれによるものと解され、文字でなく視覚的にわかりやすい指印が採用されたと推察される。

現在、四国内で確認されている真念による遍路道標石はわずか40基に満たない。本資料は真念の活動や江戸時代の四国霊場や遍路道の実態を考える上で大変貴重な資料といえる。

(専門学芸員・今村賢司)
◆ 真念の遍路道標石は、民俗展示室3「四国遍路」で常設展示中。

左面には「為父母六親の指印は「左」という文字の上から改刻されていることがわかる。